

氏名	金 瑜眞
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8 4 3 6 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	韓国人日本語学習者による句末イントネーションの生成と知覚

主査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	石田 プリシラ・アン
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	那須 昭夫
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	松崎 寛
副査	筑波大学 教授		酒井 たか子

論文の要旨

本論文は、韓国人日本語学習者（以下 **KL**）の句末イントネーションにおける生成と知覚の実態を解明すること、及び、**KL** に対する日本語音声教育への指針を得ることを目的とするものである。

KL の産出する日本語の句末イントネーションについては、句末ごとに現れる音調の上昇下降等が「失礼な感じを与える」「聞いていて疲れる」というように、否定的評価を報告するものが見られ、その原因として母語の影響が指摘されてきた。しかし、こうした上昇下降調は、日本語母語話者（以下 **NS**）も用いており、**KL** 特有のものとはいえない。また、**KL** の句末イントネーションの特徴を明らかにする上で、これまでに使用されてきた句末イントネーション類型が **KL** の句末イントネーションの実態を正確に反映しているかについては疑問が残る。したがって、**KL** の句末イントネーション生成の実態を明らかにするためには、句末イントネーション類型を見直すことと、**KL** だけでなく、**NS** の句末イントネーション生成についても検討することが不可欠である。

また、正しく発音するためには、自分の発音に対するモニター能力が重要であるとされているが、句末イントネーションに対する学習者の知覚の実態、及び知覚と生成の関係を明らかにした研究は少ない。

さらに、**KL** の日本語音声教育の指針を得るためには、**NS** が句末イントネーションをどのように評価するのかを明らかにすることも重要である。

上記のような背景及び目的を踏まえて、本論文では、以下の3つを研究課題とする。

【課題1】 **KL** の句末イントネーション生成の実態を明らかにする。

【課題2】 **KL** の句末イントネーション知覚の実態を明らかにする。

【課題3】 **KL** の句末イントネーションに対する **NS** の評価の実態を明らかにする。

本論文は以下の6章から成る。

第1章 序論

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第3章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究1】

第4章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究2】

第5章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究3】

第6章 結論

第1章では、本論文の背景と目的について述べ、各章の構成を示している。

第2章では、先行研究を精査した上で、KLの句末イントネーションをめぐる課題と本論文の位置づけを論述し、KLの句末イントネーション類型における分類案を提起している。

第3章では、2つの場面を設定し、KL・NS双方にロールプレイを行わせて得られた発話データから、KLの句末イントネーション生成の実態を検討している。第2章で提起された分類案を基に、KLの韓国語・日本語の発話データに見られた句末イントネーションを分類し、類型別出現数を比較した結果、両言語間で相違が見られ、「昇降調」は日本語に多く、「ゆすり調」は韓国語に多いことが示される。このことから、母語の影響は、類型により異なって出現する可能性が示唆される。また「友人」「上司」という改まり度が異なる2つの場面の発話データをNSと比較した結果、KLは、友人だけでなく上司にも「昇降調」を多用しており、場面の改まり度に応じた使い分けに問題があることが示される。

第4章では、第3章で頻出した「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」についてKL・NSによる自然さの評価とフォローアップインタビューを行い、KLの句末イントネーション知覚の実態を検討している。その結果、「連続的上昇調」「自然下降調」の評価得点についてはKLとNSとの間に有意な差は見られないことが明らかにされる。しかし、「昇降調」の評価得点についてはKLのほうがNSより有意に低く、「ゆすり調」の評価得点についてはKLのほうがNSより有意に高い結果が示される。また、KLは、「韓国人らしさ」「日本人らしさ」などを評価基準とする一方で、発話場面の改まり度を十分に考慮していない可能性が示唆される。

第5章では、「昇降調」「ゆすり調」に注目し、NSによる自然さの評価の実態を検討している。まず、助詞の拍数、出現する文法形式、発話場面の改まり度を変動させ、評価に与える影響が検討される。その結果、助詞の拍数は、NSによる評価に影響しておらず、先行研究とは異なる結果が示される。出現する文法形式については「昇降調」「ゆすり調」ともに、格助詞や接続助詞より名詞の評価得点が有意に低く、名詞に「ゆすり調」が出現する場合、最も低く評価される。発話場面の改まり度については、「昇降調」が改まり度の違いを反映するのに対し、「ゆすり調」は改まり度に依らず低く評価される。つまりNSは総じて「ゆすり調」を日本語から逸脱した類型として捉えていると言える。次に、ピッチと持続時間が評価に与える影響について検討される。その結果、「昇降調」「ゆすり調」ともに、ピッチの変化はNSの評価にほとんど影響を与えていないことが明らかにされる。これに対し、持続時間が長くなるにつれ、NSの評価は有意に低くなっていく。また、特に「ゆすり調」において、持続時間の変化によるNSの評価への影響は顕著であり、したがって、「ゆすり調」の音声指導の際には、上昇が開始する以前の低いピッチが続く区間において、ピッチの上下変化より持続時間に留意させ、できるだけ持続時間を短く制御することをKLに意識させる必要があることが示唆される。

第6章では、本論文を通して明らかになった内容を整理し、得られた知見を踏まえ、日本語音声教育への示唆と今後の課題を述べている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、以下の3つの点で、イントネーション研究及び日本語音声教育に多大な貢献をしているといえる。

第1に、KLの発音特徴を精査し、新たな句末イントネーション類型を提起した点である。これまでも、日本語・韓国語それぞれの母語話者の発音を分類するものとしては様々な句末イントネーション類型が提案されてきたが、KLの発音上の誤用を説明するものとしては不十分であった。著者は類型の精緻化を研究の基礎と位置づけ、多量の発話データを基に、KLの句末イントネーション記述に耐えうる類型を示している。特に、これまでは「昇降調」と「ゆすり調」とは同じ類型に分類されていたが、本論文では別の類型とすることで、多くの知見を導出することに成功している。

第2に、句末イントネーションの評価に影響を与える要因を詳細に論じている点である。厳密な条件設定による合成音声を用いた評価実験を積み重ねることで、これまで漠然と否定的評価を受けていたKLの句末イントネーションについて、評価が否定的となる要因を特定することを可能にした。

第3に、学術的裏づけのある発音指導のあり方を提示した点である。日本語教育の現場では、発音指導の内容や方法に関する明確な指針がなく、教師の教育観や裁量に委ねられてきた。そのため、学習者の発音上の問題も単に母語の干渉として扱われることが多かった。しかし、本論文は、問題の原因が必ずしも母語の干渉ではなく、学習者の意図的学習に依るものもあることを示し、指導による改善の可能性を示唆した。また、優先して指導すべき発音の選択基準と具体的な指導方法を、評価実験のデータから実証的に明らかにすることで、発音指導に学術的基盤を与えたといえる。

一方で、データ収集の手法にはいくつかの問題も見受けられる。たとえば発話データを収集する際に設定した2つの場面は、説得と報告という発話意図のみならず、発話相手の職業や上下・親疎関係等も異なり、いずれが「改まり度」として影響しているかの特定が難しい。また、評価実験における「自然さ」という教示が曖昧であり、評価する側の観点が異なっていたことも考えられる。

本論文には、上記のようにいくつかの問題が指摘されるものの、得られた多くの知見は学界に寄与するに十分な学術的基準に達しており、教育的示唆にも富むものである。今後も研究の継続と発展が期待される。以上により、本論文は、イントネーション研究及び日本語音声教育において高い学術的・教育的価値を有するものであると評価することができる。

2 最終試験

平成30年1月23日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。